

分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸域生態系 (つづき)	<ul style="list-style-type: none"> <li>「予測結果」で、今回の調査の1ペアだけの調査を元に残丘一樹林地や高木林だけを繁殖場所と断定するのは無理がある。</li> </ul>	<p>今回の調査は表-6.12.1.1(6)に示すように、のべ調査日数120日のうちで1,152回に及ぶカンムリワシの全ての行動を記録した結果に基づいており、繁殖や採餌、ねぐら入り等の全ての行動様式が表-6.12.11.(8)及び表-6.12.1.1(11)に示されております。今回の調査で確認された営巣場所はリュウキュウマツの高木林、タブノキ-コミノクロツグ群落の高木林です。また、環境省の「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」においては、カンムリワシの生物学特性として「森林に接した場所で採餌し、森林をねぐらや休息地、営巣場所として利用する」とされています。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>新石垣空港が運用された場合、新空港から石垣島北部、西部への交通量も増加すると思われる。しかし、本島におけるカンムリワシの生息重要地域への影響が全く考慮されていない。</li> </ul>	<p>予測の対象地域は、事業計画の内容及び注目種の生息状況を考慮し、事業の実施による影響を的確に判断できる範囲として、事業実施区域を含み、星野集落から水岳、三和付近を経て、轟川の南側から沿岸部にいたる地域としました。「カタフタ山の繁殖ペアが継続的に生息及び繁殖すること」を保全目標として予測・評価を実施しています。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>保全目標の考え方の再検討が必要。準備書の環境保全目標は現状維持を目標に掲げている。しかし、既に絶滅の危機にある種であれば、島全体として個体数の増加を地域の環境保全目標とされているものもあるはずである。このあたりの視点も加味した場合、さらに個体数を増やすための努力が必要とされる場合もある。このような視点からの環境保全目標の再検討が望まれる。</li> </ul>	<p>カンムリワシの保全目標は、現在カタフタ山周辺域に生息・繁殖していることが確認された個体群が工事中及び供用後において、継続的に利用していることを第一義とし、「カタフタ山の繁殖ペアが継続的に生息及び繁殖すること」としました。また、事後調査にあたっては、平成13年から継続観察してきた情報を基に適切な時期、場所、観察項目を設定し、保全措置の効果を検証してまいります。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>「猛禽類保護の進め方」の中には、開発行為に際しての手順があり、事業計画上の配慮（計画の変更、規模縮小、中止など）と事業実行上の配慮（工期、工法の調整による騒音等の対策、中断など）があるが、準備書では、事業実行上の配慮のみで、事業計画上の配慮がなされていない。</li> </ul>	<p>カンムリワシの調査及び予測は「猛禽類保護の進め方」に準じて実施しておりますが、空港の位置の選定については、準備書の参考資料-3に示すように、自然環境も含め24項目の比較検討が行われ選定されたものです。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>北大東空港の例を出して説明しているが、比較対照としているアマサギ、ムナグロ、セキレイ類、タヒバリ類は草丈の低く見通しのよい草地を休息、採餌場として用いる種であり、セッカは草丈の高い草地を繁殖場所として用いる種であり、北大東空港の例をもって本種の繁殖活動に影響がないとはいえない。</li> </ul>	<p>北大東空港の事例は、p6-12-229に示すように、工事前、工事中及び供用時においてモズ等の留鳥の出現状況が著しく変化しないことや、滑走路周辺の緑化によって、1年以内に鳥類が休息、採餌場として利用することが確認されています。本事業においてはp6-12-240に示すように、環境保全措置として滑走路周辺や法面の緑化によりセッカの好適地としての植生の復元を図ることから、セッカの生息場所が確保されるものと考えます。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ロードキルの発生が予想されるが、ごく少数であり、好適地内の個体群維持には影響は少ないものと思われる」とあり、定量的な評価が全くなされていない。</li> </ul>	<p>セッカのロードキルは宮古島の県道の事例を基に定性的に予測しましたが、p6-12-207に示すように、現地調査結果から事業実施区域内のセッカの生息数は268個体と推定され、好適地における生息密度を2.39個体/haとすると予測範囲全体1,604haの好適地には相当数が生息しているものと考えられることから、ロードキルが年間13個体程度としても、個体群維持には影響は少ないと予測しました。</p>